

強者の戦略

こんにちは。国語科の松崎です。いよいよセンター試験ですね。試験中は何が起こるか分かりませんから、カーディガンなどの脱ぎ着が簡単な服装で、出発時間に余裕を持って試験に出かけてくださいね。寒さやストレスのせいか、試験当日にお腹を壊す人がちらほら居ますので、心配な人は飲み慣れているお薬も持っていくと安心でしょう。ちなみに、緊張したときは受験票に貼ってある自分の写真を見てみてください。撮った時期は人それぞれかと思いますが、「のんきそうな顔してるな～」と、良い具合に力が抜けるかもしれません。(私が受験生のときに実践した方法です・笑)

では、今年度最後の国語の解説編です。まずは問題の確認から。

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

[A] みちのくにの白河の関こえ侍りけるに

(イ) たよりあらばいかで都へつげやらむけふ白河の関はこえぬと 平兼盛 (拾遺集)

[B] 正月二日逢坂にて鶯の声をききてよみ侍りける

ふるさとへゆくひとあらばことづてむけふ鶯の初音ききつと 源兼澄 (後拾遺集)

[C] 逢坂の関にて鶯の初音をききていとをかしければよめるか。(ロ) さらば逢坂といふことあるべし、さら
ずはさせることなし。兼盛がけふ白河の関はこえぬとよめるは、みちのくにはいとほなる所の白河の関
までゆきて、都へつげやらむとよまれたればこそをかしけれ、これはかれをまねびたるが、おとりたればみ
ぐるし。(ハ) なほつげまほしうは、ともの人ひとりしてつげにおこせむ、いとやすきことにはあらずや。

(難後拾遺)

(注)

○白河の関——陸奥への関の一つ。歌枕。

○逢坂の関——近江と山城の境にあった関。京からここを越えて東路にかかる。歌枕。

問(一) 傍線部(イ)「たよりあらばいかで都につげやらむ」を現代語に訳せ。(解答欄：14.3×3センチ)

問(二) 文章[C]は歌[B]に対する批評である。批評の要点の一つは歌[A]が白河の関を今日越え、
歌[B]が、逢坂の関で今日鶯を聞いたという、歌枕の地での経験を述べている点では同じであ
りながら、その歌い方が異なる、ということにある。

(1) 傍線部(ロ)のうち、「さらばはさせることなし」を、文脈上わかるように現代語に訳せ。(解答欄：
13.3×2センチ)

(2) 傍線部全体に語られている批評を解説せよ。(解答欄：13.3×5.5センチ)

問(三) 文章[C]の、歌[B]に対する批評のもう一つの要点は、傍線部(ハ)に語られている。

(1) 傍線部(ハ)のうち、「なほつげまほしうは」を現代語に訳せ。(解答欄：13.3×2センチ)

(2) 傍線部(ハ)の全体に語られている批評を解説せよ。(解答欄：13.3×5.5センチ)

強者の戦略

東京大学の過去問が続きましたが、最終回は趣向を変えて京都大学の過去問です。そして、苦手としている人が多い(?)和歌が全面に押し出されているものを選んでみました。

ただ、掛詞や縁語を駆使したベーシックな和歌解釈は今回ありません。問2で苦しんだ人が多いと予想されますが、ポイントとなる「あること」に気付けば今回の問題は「見掛け倒し」にすら見えてきた人もいるかもしれませんね。文法と単語と古文常識。これらをしっかりと定着させ、複合的に関連付けて、試験の最中はサッと頭の中から取り出せるようになっておきましょう！

今回の文章には注釈が二つ。「白河の関」と「逢坂の関」。「どっちも地名みたいなものだな」とサラッと読み飛ばしてしまった人は要注意です。注釈には、ご丁寧にそれぞれの語が「歌枕」であることが書かれていますね。「歌枕」の意味は主に二つ。

「歌枕」

- ①和歌に詠み込む歌語（枕詞・名所の地名など）
- ②古来、歌の中に詠み込まれてきた名所

〔A〕の歌も、〔B〕の歌も、それぞれ昔から和歌に詠み込まれてきた名所を舞台にして詠まれたもの、ということ念頭に置いてください。問2の設定問文も、読み飛ばしてはいけませんよ！

ちなみに、陸奥はざっくり言って今でいう東北あたり、白河の関は福島県あたりにありました。近江は今の滋賀県、山城は今の京都府南部です。

では、順に解説していきます。〔A〕〔B〕それぞれの和歌の前に書かれている言葉は、第1回の『伊勢物語』で解説した「詞書」に相当します。その和歌が詠まれた状況を説明してくれている文ですね。

〔A〕「みちのくにの白河の関こえ侍りける」

東北にある白河の関を越えたときに、兼盛が詠んだ歌です。今は快適な交通網が発達し、京都から陸奥などの遠方へ向かう旅路というのは楽しいものなのでしょうが（私だけ?）、昔はそうはいきません。盗賊に遭って命を奪われるかもしれないし、人っ子一人居ない山中で夜を明かさないといけないかもしれない。病気になるっても駆け込むことが出来る場所がある保証もありません。旅は重く言えば命がけ、軽く言っても今とは比べ物にならないほどの労力を要するものだったんですね。

京都からはるか遠くの白河の関にたどり着いた感慨と、その場所が昔から和歌に詠みこまれた地名だったこともあわせて兼盛は和歌を詠んだのでしょう。

「たよりあらばいかで都へつげやらむけふ白河の関はこえぬと」

傍線部分の押さえておきたい単語としては、「たより」「いかで」があげられます。「たより」は文脈に応じて訳し分ける必要性のある多義語です。多義性をまず確認し、あとから確定しましょう。

「たより」

- ①よりどころ
- ②縁・ゆかり
- ③訪れ・手紙
- ④便宜
- ⑤ついで・機会
- ⑥できぐあい

「いかで」は第2回『源氏物語』の回でも登場した単語です。願望や意志の語とセットになって、「なんと

強者の戦略

かして」「どうにかして」という意味を表すのでしたね。

文法の観点では、「たよりあらば」の「あら（未然形）+ば」の順接仮定条件は当たり前のこと、「都へつげやらむ」の語の切れ目が「都/へ/つげやら/む」となり、「つげや/らむ」にはならないということは押さえておかななくてはけません。助動詞「らむ」のように一瞬見えますが、注意してくださいね。助動詞「らむ」であれば、その直前に来るのは終止形（ラ変型ならば連体形）ですから、動詞「つげや」という摩訶不思議な動詞が出来上がってしまいます。「つげやる」は漢字表記で「告げ遣る」、つまり「知らせてやる」ということです。ここまでで分かったことをもとに現代語訳すると、「もしたよりがあるならば、どうにかして（今日、白河の関を越えたということ）都に知らせてやりたい」。

では、「たより」の意味を確定させましょう。たより、って言われると「手紙」の意味で現代では使用されますが、「もし手紙があるならば、どうにかして都に知らせてやりたい」と解釈してしまうと、手紙を書くための紙が無いような印象を受けてしまいますよね。和歌をしたためているんですから、紙はちゃんとある。また、「もし都から手紙があるならば、どうにかして知らせてやりたい」という解釈もありえますが、都からの手紙待ちだと、まさに「今日」白河の関を越えたという感動を伝えたいという下の句との整合性がとれません。それに、お手紙に託すにしても白河の関から京都はあまりに遠く、手紙がいつ届くのか、もっといえれば相手の手許へちゃんと届くのかもおぼつかない…。そう、白河の関を越えたということを知らせる手立てというものが兼盛にはないんです。彼は、何とかして知らせたかった。そう、「知らせる『機会』があれば」、と思っていたんですね。ここは、「たより＝機会」で解釈し、

「もし、良い機会があるならば、どうにかして都に知らせてやりたい」と解答を完成させましょう。

都に知らせる、そんな機会は兼盛にはなかった。だって、知らせる機会があったなら、「知らせてやりたい」という気持ちの高まりを和歌に詠むまでもなく、知らせるやればいいんですから。

では、[B]の和歌にいきましょう。

[B]「正月二日逢坂にて鶯の声をききてよみ侍りける」

正月二日に、逢坂の関で鶯の声を聞いて詠んだ和歌、ということですね。正月は一月のことですが、古文の世界では一月～三月が春、四月～六月が夏、七月～九月が秋、十月～十二月が冬でした。正月二日は、まさに春が始まったところです。

鶯は早春に鳴くことから、「春告げ鳥」として人々に愛されました。私たち現代人も、春には桜、秋には紅葉と、四季の変化やそれぞれの風物に敏感ですが、昔の人の季節への関心はそれ以上。鶯の声を聞き、春の訪れを感じていたんですね。（ちなみに、ホトトギスは初夏の早朝から鳴き始め、「夏を知らせる鳥」として親しまれました。昔の人は、人より先に夏の到来を感じようと、こっそり早く起きて、ホトトギスが鳴くのを聞こうとしていたようです）

「ふるさとへゆくひとあらばことづてむけふ鶯の初音ききつと」

この和歌の詠み手の名前が「源兼澄」であることに注意して下さい。「源氏」は、もともと皇族が臣籍降下（姓を与えられ、皇族を離れること）する際に名乗るものでした（嵯峨天皇を祖とする「嵯峨源氏」や清和天皇を祖とする「清和源氏」が有名です。ちなみに兼澄は、祖父が光孝天皇の孫であることから、「光孝源氏」

強者の戦略

という分類に入ります)。もとは皇族ということで、兼澄の出身は京だと考えられます。「ふるさと」には旧都や生まれ故郷、古馴染みの土地の意味がありますが、ここでは「ふるさと」は彼の出身地にしてなじみの土地、「京」を指すと考えてください。

『今日鶯の初音を聞いた』と、都に行く人がいれば言付けよう」ということですね。〔A〕の和歌とよく似ています。

では、問題の〔C〕の文です。

問2の設問文から、〔C〕は歌〔B〕に対する批評を行っており、「歌枕の地での経験を述べている点では同じでありながら、その歌い方が異なる、ということ」が批評ポイントとなっているということでした。

「歌い方が異なる」ってどういうことでしょうか？

それを解決するために、まず「歌枕」って何か再確認しましょう。「①和歌に詠み込む歌語（枕詞・名所の地名など）」「②古来、歌の中に詠み込まれてきた名所」でしたよね。

じゃあ〔A〕の歌は、歌枕の地・白河の関で、どのような歌い方をしているのでしょうか？

「たよりあらばいかで都へつげやらむけふ白河の関はこえぬと」

「白河の関」という歌語を詠み込んでいますね。「歌枕」の②の意味となる土地で、①の意味の通り、歌に詠み込むべき歌語として、白河の関を和歌中に詠んでいるんです。

一方、〔B〕ではどうでしょう？

「ふるさとへゆくひとあらばことづてむけふ鶯の初音ききつと」

詞書があるので逢坂の関での経験だということが分かりますが、和歌だけを見ても逢坂の関での出来事だということはわかりませんよね。

そう、〔A〕と〔B〕の和歌の詠み方のちがいというのは、「歌枕」の扱いの違いなんです。和歌に詠み込まれる名所で、歌語として地名を詠み込んでいるか。〔A〕は詠み、〔B〕は詠まなかったという違いがあるんですね。

「逢坂の関にて鶯の初音をききていとをかしければよめるか。」

(Bの和歌は)逢坂の関で、鶯の初音を聞いて、とても趣深かったので詠んだのか。

「さらば逢坂といふことあるべし、さらばはさせることなし」

「さらば」は「それならば」。「さらばは」は、「然らずは」で「そうでないなら」。「させることなし」は、連体詞「させる」がポイント。大体は、下に打消しの言葉を伴って、「それほどの」や「たいした」という意味を表します。直訳すれば、

「それならば、逢坂ということがあるべきだ。そうでないなら、たいしたことはないだろう」

分かりやすく、言葉の補足+αをしていきましょう。「それならば」の指示内容は、「逢坂の関で鶯を聞いたことを詠んだのならば」ということで大丈夫ですね？

では、「逢坂ということがあるべきだ」はどうでしょう？「逢坂ということ」。逢坂は地名であって、「事柄」ではありません。「こと」の漢字変換を「事」にしてしまうと、しっかりこないんですね。じゃあ、それ以外の「こと」は？…そう、歌語である「歌枕」がポイントとなっている文章なので「こと＝言」です。「逢坂ということ」は、「逢坂という言（葉）」。

強者の戦略

「そうでないなら」は、「逢坂という言葉がないならば（逢坂という言葉が歌に読み込まれてないならば）」
「たいしたことはない」は、「この〔B〕の歌はたいしたことはない」と主語を補えば文意がすっきりするでしょう。

以上を踏まえると、傍線部（ロ）の現代語訳は、

「逢坂の関で鶯を聞いたことを詠んだのならば、『逢坂』という言葉を読み込むべきだ。『逢坂』という言葉が歌の中に詠まれていないならば、この歌はたいしたことはない」となります。

（なお、問2（1）の設問条件により、下線部分のみ解答すればOKです）

そして、どうして逢坂の関で鶯を聞いたことを詠んだ場合に「逢坂」という言葉を読み込む必要があるのかといえば、『逢坂（の関）』が歌に詠み込まれるべき歌枕だから、という点を踏まえれば、傍線部（ロ）の趣旨も説明できたこととなります。

「兼盛がけふ白河の関はこえぬとよめるは、みちのくにはいとほるかなる所の白河の関までゆきて、都へつげやらむとよまれたればこそをかしけれ、これはかれをまねびたるが、おとりたればみぐるし。」

こちらは一気に読みましょう。文法で気にするところとしては、「～こそ…（已然形）、～」の逆接強調法が使用されているくらいですね。

「兼盛が『今日白河の関を越えた』と詠んだのは、はるか遠い陸奥の白河の関まで行って、『都へ知らせたい』と詠んでいるから趣深いのであるが、これ（兼澄の歌）はかれ（兼盛の歌）を真似してはいるものの、真似した歌よりも下手であるのでみつももない。」

手厳しい批判ですね。ただ、確かに最近は昔の曲をカバーするのが流行しているように思うのですが、元のアーティスト以上（もしくは同等の）の歌唱力やアレンジ力がないと、元の歌のファンから「元の歌の方が良い！」って批判されてしまいますよね。

「なほつげまほしうは、」

「なほつげまほしうは」の現代語訳、ぱっちり出来ましたか？「なほ＝それでも・やはり」だけに気をつけていたのでは減点になってしまいます。単語は、「なほ＝それでも」「まほし（助動詞）＝～たい」を押さえておけばいいのですが、「まほしうは」にこっそり含まれている文法的なポイントを見落としてはいけません。「まほしう」は、形容詞「まほし」の連用形（もしくは未然形）ウ音便ですよ？

形容詞の連用形＋係助詞「は」

もしくは

形容詞の未然形＋接続助詞「ば」の清音化

順接仮定条件

「動詞の未然形＋ば」だけでなく、「形容詞（&助動詞「ず」）の連用形＋は」、「形容詞（助動詞「ず」）の未然＋ば」そして「助動詞『む』の連体形＋助詞」の形も、順接仮定条件になることを押さえておきましょう。この部分に限らず、「未然＋ば（清音化）」なのか「連用形＋は」なのかは、文法学者の中でも議論が分かれています。だから、東大や京大の試験では細かに活用形や品詞を聞くような問題はまず出題さ

強者の戦略

れないでしょう。ただし、今回のように現代語訳は出てきますから、気を付けましょうね！

すると、「なほつげまほしうは」は、「それでも（鶯の初音を聞いたことを）知らせたいのなら」となります。

「ともの人ひとりしてつげにおこせむ、いとやすきことにはあらずや。」

「ともの人」は「供の人」。一緒に行動をしているお付の人ですね。「ひとりして」の「して」は、使役の実働者に付く助詞です。「やすきこと」は、「お安い御用」の「やすし」。「簡単なこと」くらいの意味です。文末「～ずや」は「打ち消し+反語」で「～ないだろうか、いや～だ」の意味となり、結局肯定の表現となるので「とても簡単なことだ」となります。

傍線部（ハ）を全て現代語訳すると、「それでも（鶯の初音を聞いたことを）知らせたいのなら、供の人を一人使いによこせば、簡単なことだ（簡単に知らせることが出来る）」となります。

さて、最後の問は単に現代語訳をするのではなく、批評を解説しなくてははいけません。

今回の批評は、ひたすら〔A〕の和歌と〔B〕の和歌の対比で語られていましたよね？

〔A〕歌枕を詠み込んでいる ▼ 〔B〕歌枕を詠み込んでいない

これが、一つ目の批評でした。

では、二つ目は？傍線部（ロ）以降の文から探してみましょう。

〔A〕遠い白河の関のこと ▼ 〔B〕・・・・・・？・・・・・・

〔A〕が「遠い」場所のことを詠んでいる、とあるのだから〔B〕は「近い」場所、ということですね。逢坂の関は京都南部と滋賀の境。都を基準にすると、白河の関とは比べものにならないくらい近距離ですね。

〔A〕遠い白河の関のこと ▼ 〔B〕近い逢坂の関のこと

さらに、〔B〕の和歌について「供の人を一人使いによこせば、簡単なことだ（簡単に知らせることが出来る）」に注目すると、

〔A〕（遠距離のため）知らせる機会がない ▼ 〔B〕（近距離のため）簡単に知らせることが出来る

という対比も成り立ちます。

知らせる機会がない、そのために兼盛は和歌に思いを詠み込んだんですね。

だって、知らせる機会があったなら、「知らせてやりたい」という気持ちの高まりを和歌に詠むまでもなく、知らせてやればいんですから。（3ページ目解説より）

兼澄は、簡単に都に知らせることが出来るくらいの距離で〔B〕の和歌を詠んだ。批評者からすれば、「近い距離なんやから、わざわざ和歌に詠んでもパッと使いの者を京に使わしたらよろしいやん」ということなんですね。

強者の戦略

すると、傍線部(ハ)全体で語られている批評とは、

「遠く離れた白河の関とは違い、都からほど近い逢坂の関で鶯の初音を聞いたということをどうしても都に伝えたいならば、お供の人一人を知らせにやれば簡単に済むことであって、わざわざ和歌に詠むまでのことではないということ。」

では、以下に解答をまとめます。

問(一)

もし、良い機会があるならば、どうにかして都に知らせてやりたい。

問(二)

- (1) 歌枕である「逢坂」という言葉を詠み込んでいないならば、この歌はたいしたことはない。
- (2) [B] の歌は、歌枕の逢坂の関で鶯の初音を聞いたことが趣深かったとしても、それならば「逢坂」という言葉を詠み込むべきであるのに、そうしていないのでたいした歌ではないということ。

問(三)

- (1) それでも鶯の初音を聞いたことを知らせたいのなら
- (2) 遠く離れた白河の関とは違い、都からほど近い逢坂の関で鶯の初音を聞いたということをどうしても都に伝えたいならば、お供の人一人を知らせにやれば簡単に済むことであって、わざわざ和歌に詠むまでのことではないということ。

4回ではありましたが、以上で2011年度分の国語の解説を終了します。

今まで培った力を存分に発揮して、「強者」になってくださいね！